

## 平成8年度助成事業の報告

平成8年度本基金の助成は総額 3,400万円

(財) 日本自然保護協会との共同事業による公募助成	21件	2,200万円
(財) 世界自然保護基金日本委員会の事業助成	1件	300万円
(財) 日本自然保護協会の事業助成	1件	300万円
その他の助成	4件	600万円
が決定、今年より平成9年にかけて助成。(内容は以下に紹介)		

## 平成8年度本基金の助成内容

- (財) 世界自然保護基金日本委員会の独自事業助成
  - ・白保サンゴ礁保護にかかわる諸活動及び WWF-Japan Science Report Vol.3 の発行  
助成額：300万円  
1998年開設予定のセンターの資金募集のために講演会を開催、サンゴ保全に関する普及教育も行う。また、助成事業に関する報告書第3巻を発行する。
- (財) 日本自然保護協会の独自事業助成
  - ・沖縄やんばる地域の生物多様性保全事業  
助成額：300万円  
やんばるの森には多くの稀少生物が生息するにもかかわらず、保護区の設定もなく開発が進められていること、また近い将来この地域にある米軍訓練場の返還も予想されることから、この地域の自然、社会環境調査を活用、生物多様性保全に必要な施策の提案書を作成し、また各種会合を開催する。
- 極東ロシア森林のホット・スポット・プロジェクト 地球の友日本 代表：亀井ナオミ  
助成額：400万円  
シベリアの森林減少について地球の友日本がロシアの研究者、保護活動家を動員して調査選定したホット・スポットの中から日本にも近い4箇所に関する調査プロジェクトを昨年度助成したが、今年も一部の調査について助成を行う。その結果をふまえて保護策が現地行政当局へ提出される。
- 長良川河口堰モニタリング調査(継続分-5年間の第4年度)  
助成額：100万円  
長良川河口堰モニタリング調査グループ  
代表：田中豊穂(中京大学教授)  
引続き諸調査を実施し、95年度より開始した河口堰の運用による指標の変化を監視する。
- 東アジア国立公園保護地域会議  
助成額：50万円  
東アジア国立公園保護地域会議日本組織委員会  
代表：沼田 眞(日本自然保護協会会長)  
本年7月に開催されたIUCN-CNPPAの上記地域会議に助成を行った。
- 湿地生態系の保存 -河川流水・雨水・湧水の環境調査-  
助成額：50万円  
釧路ウェットランドセンター技術委員会  
代表：辻井 達一(技術委員長)  
北海道東部のラムサール条約登録湿地について河川流水・雨水・湧水の環境調査を実施し、また国際湿原保全釧路会議を開催。

○プロ・ナトゥーラ・ファンド（第7期）助成先一覧

（本基金と（財）日本自然保護協会との共同事業による助成。助成金総額 22,000千円）

NO.	タイトル	グループ名	代表者	助成額:千円
・国内研究助成				
1	「日本の地形レッドデータブック」第2集（中部日本編）の作成	日本の地形レッドデータブック作成委員会	小泉 武栄 （東京学芸大学）	2,000
2	イリオモテヤマネコ集団の保護をめざした遺伝子多様度の評価	哺乳類遺伝的多様性研究グループ	増田 隆一 （北海道大学）	1,400
3	韓国におけるユーラシアカワウソの生態及び保護に関する研究	カワウソ研究グループ	安藤 充一 （環境科学(株)）	1,730
4	中海本庄工区の種多様性に関する調査	汽水域研究グループ	國井 秀伸 （島根大学水圏環境センター）	1,150
5	ひるがの湿原保護のための基礎研究	岐阜大・東北大共同ひるがの湿原研究グループ	西村 由紀 （東北大学）	1,100
6	非破壊計測によるギフチョウ蛹期の野外における成虫形成の解明	天竜村ギフチョウ研究会	野牧 君夫 （太田建設(株)）	900
7	半野生ジカの給餌が栄養と個体群動態に及ぼす影響	金華山島シカ研究グループ	高槻 成紀 （東京大学）	1,000
8	ザトウクジラの鳴音による個体識別と保全への貢献	大型鯨類生態保全研究会	加藤 由香 （東京大学）	1,000

・国内活動助成

9	「マダガスカル鳥類フィールドガイド」の出版	マダガスカルの鳥研究会	パティリャ・ラトマナ （大阪市立大学）	1,200
10	伊豆大島でのウミガメの繁殖と漂着状況	みどりの地球大好き会	村上 博基 （木炭製造・農業）	200
11	中山間地域における人工湿原の観察と保護活動	水辺の未来を考える会	紙谷 智彦 （新潟大学）	700
12 (職)	北海道自然保護読本（野付岬・風蓮湖の自然）の発行	(社)北海道自然保護協会	俵 浩三	700
13	ナチュラリスト講座テキスト作成	(社)大阪自然環境保全協会「ナチュラリスト課」	大野 尊信 （大阪市立動物園）	450
14	日本における「自然の権利」運動の記録（～1997.6）	自然の権利セミナー	佐久間 淳子 （雑誌記者）	400
15	車軸藻類の絶滅・絶滅危惧種の保護と自然界への復元に関する科学的調査と教育研究	車軸藻研究教育グループ	野崎 久義 （東京大学）	1,000

（8頁へ続く）



今年の夏、ロシア極東地域森林・生物多様性ホット・スポットのプロジェクトで7月から8月にかけて4週間ほどサハリンに滞在する機会がありました。函館空港からユジノサハリンスクまで所要 2時間ほどの直行便があり、近い隣国ですが鉄のカーテン時代のイメージが残るせいか遠く感じられる所です。

### モネロン島

戦前の日本領時代は海馬島と呼ばれ、人口700人以上もありました。1986年にこの島の北方で大韓航空機が撃墜された事件がまだ記憶から消え去らない人も多いと思います。ソ連時代には多数の軍隊が駐留していたようですが、1996年の春にロシアの自然公園に指定され、現在は灯台の関係者と自然保護関係の数人が住むだけです。自由に渡島できるわけではなく、サハリン州の自然保護委員会の許可が必要です。その許可を得るためにユジノサハリンスクでかなり多くの関係者に会いました。島を自然公園として運営して行くにはどうすればよいか大いに悩んでいる様子ですが、一致しているのは日本からの援助を熱望するという点です。私がプロナトゥーラの関係でサハリンに来たということで、多分将来の資金援助を期待してのことと思いますが、船賃を無料にしてくださることとなりました。



モネロン島山頂部

5日間を交渉と諸手続きに費やして、サハリン南西のネベルスクから7月29日に船出することができました。船はロシアの漁業監視船で、長さ15mほどですが、GPS、レーダー航法装置など、設備の整った高速船です。聞けば日本の造船所に発注したものだとのこと。これで日本の漁船を捕まえているのかと思うと複雑な気持ちになります。ネベルスク南方海上には石油試掘の巨大なリグが見えました。2時間ほど南西に航行しますと島が見えてきます。ざっと見渡したところ、ほとんどが草原で礼文島に極めて似た姿です。小形漁船が停泊できる程度の港があって、船はその岸壁に着きました。港の外に岩の島があってもすごい数のウミネコが乱舞しています。港ではユジノサハリンスクから遊びに来ていた医師のグループがダイビングを楽しみ、盛んに魚、貝、ナマコなどを採っています。港の近くには数軒の建物がありそのうちの коттеージ風の2階屋に泊まれることになりました。電気設備はありますが発電機が故障中とのことでローソクが頼りの生活です。なかなかしゃれた建物ですが、サハリンのすべての事物と共通で、メンテナンスの悪いのが泣きどころです。

宿舎の周りはオオイタドリ、アキタブキ、オニシモツケなどの大形の草原で、急斜面のところには露岩があり、モネロンに固有とされるトドシマゲンゲが生えています。わざわざモネロン島にいったのは、一つにはこの植物を見たかったことがあります。日本人にとっては戦前に若干の記録があるだけで、幻の植物ともいえるものでした。トドシマゲンゲはロシアの絶滅危惧植物のリストにも挙げられています。しかしトドシマゲンゲはいかにも礼文島のレブンソウに似ています。まだざっと調べただけですが、私はレブンソウとトドシマゲンゲは同一の種ではないかと考えています。更に岩場を登るとレブンウスユキソウも生えており、ちょっと礼文島にいるのではないかと錯覚するほど地形、地質、植物が似ています。

翌日、オオイタドリ、オニシモツケなどの草をかき分けて、山頂に到達しました。山頂は平坦で、エゾカンゾウ、チシマフウロなどの草原で、6月中旬の花時にはさぞ美しかろうと思わ

れます。所によりチシマザサの丈の低い群落があり、ダケカンバの茂みも見られます。また西側は断崖になって切れ落ちており、崖の上端にはエゾツツジ、フタナミソウ、チシマキンレイカなどが見られ、これらすべてが礼文島と同じ趣です。礼文島とモネロン島は、姉妹島といってよいでしょう。

ロシアの当局者はこの島の自然観察のツアーを盛んにしたい意向のようです。しかし島が小さく、アプローチが難しい（海が荒れます）など難点も少なくありません。

## ナビル山地

今回の主目的は、サハリン東海岸のナビル山地の自然保護区候補地を見ることにありました。北緯50度の少し北に位置し、標高1,500m前後の山稜の東側に手つかずの原生林があり、すぐ近くまで伐採が迫っているという状況です。ユジノサハリンスクで会った自然保護運動家は、ここをロシアで最も厳しく保護される自然保護区（ザパートニク）にしたいと語っていました。調査に同行したのはロシア・アカデミー・海洋地質・生物学研究所の森林生態学研究者のレナート・サビロフ博士と、その夫人で同じ研究所の植物標本庫の主任であるフロラ研究者のナデジャ・サビロワ博士、それに日本語が達者な山案内人のワシリーの3人です。ワシリーは以前野生生物保護局に勤めていた経歴があり、動植物に詳しく、あらかたの植物は学名で覚えているという有能な人間です。今回は通訳・案内・料理人を務めてくれました。

調査はユジノサハリンスクから鉄道で14時間ほど北の終点ティモルスクから始まります。ユジノサハリンスクからティモルスクまでは1日2便あります。途中、突岬山・樫保岳などの山が車窓の左右に見えて退屈することはありませんでした。2つの山は戦前の調査で高山植物の豊富な山として知られています。特に樫保岳はサハリンで最も多数の固有種が見られる所として有名です。しかし森林は山火事の影響が著しく、原生林のようなものは遂に目にすることができませんでした。

われわれの目的地はナビル山地の東側のプルシュ・プルシュ川とウエンゲリ川の二つの川の流域です。サビロフ博士らはすでに7月にプルシュ・プルシュ川を調査していたので、今回はウエンゲリ川流域を目指しました。この地域に至る道路はなく、営林署などの調査もキャタピラ付きの車でを行っています。今回も数年前の調査車の走行跡が野外を歩く際に助けとなりました。今回はヘリコプタをチャーターする予定でしたが、チャーター料の値上がりのため、サケ・マスの密漁監視用のヘリコプタの空き時間に運んでもらうことになりました。このヘリコプタは8人ほど乗れる中型機ですが上昇能力が低く1000mほどの山稜を命からがら超える場面が何回かありました。

最初に着陸したのはウエンゲリ川中流の低い河岸段丘で、背丈1mから2mほどの高さの草原です。このあたりは川沿いにこのような草原が点々と分布し格好のキャンプ地になります。水を求めて川の方へ降りて行くとオオバヤナギ、ドロノキ、ケショウヤナギなどの立派な林があり、すこし小高いところにはハルニレも見られます。林の下は2mを超えるアキタブキ、チシマアザミ、エゾニュウなどが茂り、ヒグマの踏み跡がやたらとあります。まさにヒグマの天国で、あたりを歩くにはヒグマの踏み跡をたどるよりありません。ヒグマが寝転がったあとや糞に至る所であって心細いのですが、ロシア側の3人は、今の季節は食べ物が沢山あるので、ヒグマはおとなしく危険はないといって、ヒグマには頓着なく歩き回ります。しかし至近距離



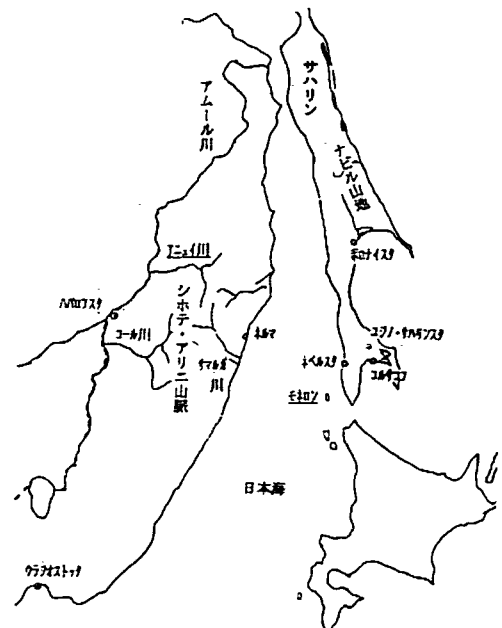
グロモワ山 (1427m)

にヒグマがいるのは確かで、ヘリからは川沿いに歩き回るヒグマを何頭も目撃しました。このあたりは山の麓にあたるところで、すぐ近くに山の斜面がみえます。一方には川からの比高数十mの台地が広がっています。ところがこの斜面や台地の林は、すべて山火事跡のグイマツの林です。山腹に突き出した石灰岩の岩峰に登って展望しても見渡す限り山火事の跡です。サビロフ博士が成長錐でグイマツの樹齢を見たところ、最も古いものは120年ほど、新しいところは30年ほどで、この地域は何回もの山火事を経験していることがわかりました。その後ヘリから観察したところウエンゲリ川流域は1500mを超える山頂から河口まで、すべて山火事を被っていることがわかりました。山火事の被害に遭っていない原生林の稀少さは相当なもので、結局この地域のエゾマツを中心とする原生自然の林はプルシュ・プルシュ川の中流の平坦地に限られるようです。この山火事跡の乾いたグイマツの林の下にはサハリンの固有属として知られているヒトツバオキナグサが点々と生えています。このヒトツバオキナグサは高山植物とばかり思っていたので、これは意外でした。

第2キャンプはウエンゲリ川の水源の一つであるグロモワ山(1427m)というサハリンで高さ第6位ほどの山の中腹の尾根になりました。ここは高さ2mほどのハイマツ群落が山火事で焼けた跡で、一面にハイマツの枯れた幹が散乱し、ヒメイツツツジがびっしりと地表を被っています。ヒメイツツツジは精油成分が多く、あたりは一面にその香りが立ちこめています。ワシリーはその匂いのために夜安眠できなかったとっていました。さてこの海拔720mほどの地点から長い長い尾根をたどりグロモワ山をめざしました。山頂にいたるまで山火事の痕跡はありますが、岩場や雪溪のまわりなどには、かなり豊かな高山植物の群落があります。グロモワ山はかなり独立した鹿島槍のような姿の山ですが、隣の山を遠望すると山頂が巨大な石灰岩のブロックからできています。きっとこのバラガン山(1471m)には面白い植物が見られるに違いありません。というのもまた石灰岩や蛇紋岩のところには、どこでも変わった植物が見られるのはよく知られたところで、先に登った石灰岩の岩峰にも興味深い植物が多数見られたからです。

第3キャンプは河口から3kmほどの上流の、グイマツの林の中にある狩小屋になりました。ここから海岸に出、ヒグマの足跡だらけの海岸を7kmほど歩いてプルシュ・プルシュ川の河口に到達しました。丁度カラフトマスの遡上が始まったところで、カラフトマスの大群で川が黒く見えるほど、ヒグマも忙しくてわれわれにはかまっていられなかったのでしょうか。帰りは雨の中をヘリでプルシュ・プルシュ川の流域とその北方に連なる地域を見ましたが、プルシュ・プルシュ川の原生林地域のすぐ近くまで大規模な伐採が迫っており、この地域がまさに自然保護のホット・スポットであることを実感しました。

能力の低いヘリを限られた時間しか使えず、行動に制約が多かったのですが、人跡稀な自然のなかでの楽しい経験でした。ウエンゲリ川流域では、オオバコのような人里に生える植物は遂に1本も見ることがなかったのも初めての経験です。ワシリーは今回の旅をエッセイにまとめるといっていました。そのタイトルは「ヒグマの道を通して..」としたいとのこと。



沖津 進 (千葉大学園芸学部助教授)

1996年6月、ロシア共和国極東地方シホテーアリニ山脈北部を流れるアニュイ川を、約2週間かけて、上流部標高650mからアムール川合流点近く標高40mまで約280kmにわたってゴムボートで下り、周囲の森林植生を観察する機会を得た。これは、「極東ロシアの森林ホット・スポット・プロジェクト」に対する助成の一環である。ロシア側の受け入れ機関はハバロフスクの水質・生態系問題研究所で、その研究員5名、アメリカ人留学生1名、小生の計7名で川下りした。

アニュイ川はシホテーアリニ山脈北部、北緯48°15′、東経137°45′、標高1460mの山巔に端を発し、タルトギヤニ山(2090m:シホテーアリニ山脈の最高峰)の東山麓を北流した後、西に向きを転じてアムール川に合流する。全長は約350kmに達し、シホテーアリニ山脈中でも規模が大きい河川のひとつである。山岳部から平野部まで、上流から下流にかけての植生、地形景観の変化が大きい。この流域には自然性の高い森林が大規模に残存分布していると言われていて、それらに関する詳しい情報が望まれていた。しかし、山が深くアプローチが困難なことなどから、我が国はもとより、ロシア共和国にあってもこれまで情報がきわめて限られていた地域である。

6月5日、ハバロフスクからヘリコプターで川下り出発点に飛ぶ。1時間半で到着。河原に降り立つ。これ以後2週間、人跡未踏の地をゆくことになる。途中、シホテーアリニ山脈西斜面上空を飛ぶが、全体にかなり伐採の手が入り、いわゆる原生林は殆ど残っていない。しかし、アニュイ川流域はアプローチが困難なこともあって、手つかずの森林が豊富に残っている。川の流れは緩やかで、ゴムボートで流れに任せて下ると時速4-5km程度となる。途中河原にキャンプしながら、毎日4-5時間程度、ゆっくりと下っていった。自然が豊富なだけに魚も釣り放題である。ただし、魚類相は必ずしも豊富とはいえず、主に釣れていたのは2種(ロシアでハリウス、レノクとよばれるもの)、さらに下流部でアムールイトウが加わる程度である。ロシア人研究者は釣りの方に主眼があったようだ。キャンプではたき火をして、釣った魚を料理していた。魚を筒切りにして、ジャガイモとともに水から煮て塩味をつけた、ウハと呼ばれるスープが主である。これは、しかし、お世辞にもおいしいとは言い難い。ロシア人は喜んで食べていた。刺身用の醤油やわさびをもって行かなかったのが悔やまれる。そのほかにはゆでた米やソバ、スパゲティなどが主体で、こうしたものに羊肉などの缶詰を混ぜて、味つけして食べる。どれも首を傾げるような味だが、ほかに食べるものがないので仕方がない。

下りはじめの頃は木の葉が展葉したばかりで、寒いぐらいであったが、最後のころは夏のような気候となった。それとともに、川下り後半は蚊に悩まされることとなった。川の様子は、いわゆる滔々と流れる状態で、日本の河川ではあまり適切に対比できるところはない。中、下流部では川幅は40-50m程度になる。川自体に大きな滝や激流などの危険なところはほとんどなく、ゴムボートでも問題なく下れる。しかし、下流部では大きな流木が川を塞ぎ、ゴムボートが通過できないため、荷物を下ろして手渡しや背負ってそこを乗り越えることが何度かあった。流木は、川を塞がなくとも水面下に隠れていることが多く、

知らずにその上を通過するとゴムボートを突き破ることがあるので、きわめて危険な存在である。さらに、下流部では川が網目状に分流し、本流を見分けるのが難しくなる。分流に入ってしまうと流れが緩やかになり、時には澱んでしまって始末に悪い。そういったわけで下流部の方が川下りには困難を伴う。

林冠優占種に基づいて流域の森林を相観区分すると、上流から下流にかけて、以下のような森林タイプが順次観察された。1) エゾマツ-グイマツ林。上流部標高450mまで、この2種の量比は変化するが、下流へ向かうにつれてエゾマツが優占するようになる。チョウセンミネバリは混交するが僅かである。2) エゾマツ-チョウセンゴヨウ林。中流部から平野部に出るまで、グイマツと徐々に入れ替わる形でチョウセンゴヨウが現れる。落葉広葉樹、特にチョウセンミネバリの量比が大きくなる。ときにチョウセンゴヨウが純林状となる。3) チョウセンゴヨウ-落葉広葉樹混交林。下流の平野部。エゾマツは減少し、アムールシナノキ、カエデ類、ヤチダモ、ハルニレなどの冷温帯性落葉広葉樹が増加してチョウセンゴヨウと混交林を作る。林分高30mに達し、チョウセンゴヨウは林冠で突出する。モンゴリナラの分布量は少ない。この流域を代表する森林であるとともに、世界的にみても冷温帯の落葉広葉樹-針葉樹混交林がこれだけまとまって分布している例はおそらくないであろう。最も貴重な森林といえる。4) 山火再生林。至る所にあるが中流部では大面積で広がる。グイマツとカンバ類で構成されるが、両者の出現や比率は機会的である。5) 河原や段丘に分布する溪畔林。ハルニレ、オヒョウ、ヤチダモ、ドロノキ、ケシヨウヤナギなどが主要構成種である。主要構成樹木の大半は北海道にも分布している。

この流域における森林分布の大きな特徴は、中流部以下でチョウセンゴヨウが最も主要な森林構成要素となっていることである。これにエゾマツや落葉広葉樹が混交することで森林タイプが分化する。主要針葉樹はグイマツ-エゾマツ-チョウセンゴヨウと変化する。極東アジアの水平分布では基本的にはグイマツとチョウセンゴヨウが接する。チョウセンゴヨウの優占とエゾマツ優占林の成立が森林植生地理的には重要であろう。

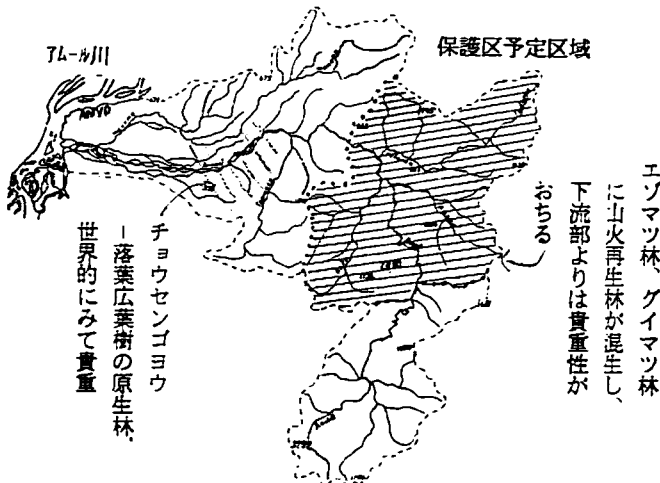


アニューイ川中流、ヤナギ林・ドロノキ林



アニューイ川調査隊のゴムボート

アニューイ川流域の植生



No.	タイトル	代表者	所属機関	助成:冊
16	中国秦嶺山脈の四川キンシコウの分布と生息地と保護戦略について	李 保国 (リー・バクオ) (中国)	中国西北大学	1,300
17	中国安徽省における森林オオカミ保護のためのホームレンジ、パックサイズ及びニッチェに関する研究	胡 小龍 (中国)	安徽大学	1,500
18	ウスリーにおけるシマフクロウの生息状況と保護のための対策に関する研究	Sergey Surmach (セルゲイ・スルマフ) (ロシア)	ロシア科学アカデミー	970
19	天童森林公園における植生復元及び保全管理に関する研究	宋 永昌 (ソウ・ヨンチャン) (中国)	華東師範大学	1,200
20	富栄養化し、濁度の高いハンガリー・バラトン湖における草食性甲殻類の捕食者としての機能の精確な評価	Laszlo G. Toth (ラスロ・トゥート) (ハンガリー)	ハンガリー科学アカデミー	1,100
21	南アフリカ共和国西海岸におけるコシャチイルカの潜水行動・生活域・回遊について	Jeremy David (ジャーミー・デーヴィット) (南アフリカ)	海洋水産研究所	1,000

平成7年度決算ならびに平成8年度予算

当基金では平成8年5月20日に第7回評議員会・理事会を開催し、平成7年度の事業報告、決算報告及び平成8年度の事業計画、収支予算案が承認されました。決算と予算は次表の通りです。

平成7年度決算ならびに平成8年度予算 (単位:千円)

項目	平成7年度		平成8年度
	予算	決算	予算
(収入の部)			
基本財産運用収入	65,000	54,970	53,800
運用財産収入等	100	2,724	100
前期繰越金	8,214	8,214	10,657
収入合計	73,314	65,908	64,557
(支出の部)			
事業費	45,000	36,029	36,000
活動助成	(14,000)	(7,620)	(8,000)
調査研究助成	(30,000)	(27,380)	(26,000)
事業管理費	(1,000)	(1,029)	(2,000)
管理費等	20,500	19,222	20,900
次期繰越金	7,814	10,657	7,657
支出合計	73,314	65,908	64,557

**編集後記** 第5号をお届け致します。ずいぶん御無沙汰してしまい申し訳ありません。今回は極東ロシアに焦点をしばって特集号と致しました。ヒグマから住居侵入罪で訴えられそうな大場先生のお話や、沖津先生の川下りのご苦労話はきっと皆様にも興味深くお読みいただけると思います。日本の秋はもう通り過ぎましたが、今秋の紅葉は全国的にとっても見事でしたネ。どんなに忙しくても自然を楽しみその素晴らしさを後の世に残したいと願う心は失いたくないものです。 岡本和子 記

Pro Natura ニュース第5号

発行者: 財団法人 自然保護助成基金  
発行年月日: 平成8年11月28日

〒150 東京都渋谷区松濤1-25-8  
松濤アネックス2階

TEL:03-5454-1789 FAX:03-5454-2838